佐多稲子「灰色の午後」論

――恥をさらすということ――

北川秋雄

一、

「灰色の午後」は一九五九年一〇月から翌年の二月まで『群像』に連載され、同名の単行本として、一九六〇年三月に講談社から刊行された。発表当時の評価を見ると、平野謙は、「今月の小説（上）――完結した二長篇――」で、佐多稲子が自身の体験を客観的に捉えることなく、時代や思想との関係も描かれずに、結果としてデカダンス小説に墜していると述べている。[1] 阿部知二・平林たい子・亀井勝一郎[2]、小田切進[3]、江藤淳[4]、小久保実[5]、中村真一郎[6]は私小説とみなして、佐多の自己客観化不足を指摘している。小田切にいたっては、〈自己を客観化しきれない中途半端なつきだしかたには、新しい自己瞞着と敗北を、もう一度重ねる恐れがないとはいえぬ〉とまで酷評している。一方、十返肇は、〈社会の中の私〉に自覚的で、思想性が確保されているとして、数子と折江の対照的な配置の仕方に、佐多の自己凝視の深さを読み取っている。[7] 草部和子も、佐多の自己凝視が徹底していることを評価したうえで、誠実な人間が、すさまじい歴史の進行のなかでは、時として、彷徨や荒廃の時間があったとしても許されるのではないかと弁護している。[8] また、野間宏は〈思想と肉体、作家の創造と夫婦の関係という問題について〉〈夫婦の共犯性という新しい地点に追求をすすめたという点から、この作品を高く評価する。〉と述べて、新たに〈夫婦の共犯性〉に着目した。[9]

研究としての「灰色の午後」論は、一九八〇年前後から小林裕子、長谷川啓によって提出された。小林は、「解題『灰色の午後』の虚構性」[10]、「『灰色の午後』について」[11]において、佐多の実生活上では、「乳房の悲しみ」や「樹々新緑」を執筆するという気迫に満ちてい

た時期であるにも関わらず、その側面は捨象され、折江の孤独が過度に強調されていることから、これまで自伝的に読まれて来た「灰色の午後」は、フィクションとして読み直す必要があると指摘した。その上で、日本共産党を批判する立場に立って、過去の点検による自己の全体像回復を目指したものであり、自身の転向を客観化しえたと評価する。長谷川啓は「『灰色の午後』論――夫婦の共犯の風景――」において、転向問題からもフェミニズムの視点からも〈妻の座からの夫告発の書〉として〈傑出の書〉であると評価する。一方で、〈吉本隆明の批判に厳しく応えたところで終わり、しかも狭い倫理性に終っていて、正当派（人間の複雑な陰影を解さぬ公明正大さ）宮本百合子をモデルとする数子の、惣吉の不倫にまつわる愚かしい言動を《私たちの時代の善意の抹殺を意味する事柄》と断罪する論理を越えられないどころか、同じ地点でとどまっている結果になっている〉と指摘している。[12] 佐多は、はたして、「灰色の午後」において、日中戦争勃発期の自己客観化を目指していたのであろうか。さらに夫を〈告発〉することや宮本百合子の〈倫理性〉を追認することになっているであろうか、再検討する必要があると思う。

日本共産党の第七回党大会は、一九五八年七月二一日から八月一日に開催された。最大の議題は党章（綱領と規約に相当する）草案であった。春日庄次郎らは草案に反対し、敵はアメリカ帝国主義ではなく、日本独占資本であり、当面する革命は社会主義革命であると主張した。多数派は三分の二の賛成を得ることが困難と判断し、綱領部分の採決を避けて、次の大会で〈引き続き討議すべき草案〉として残すことにした。さらに五〇年問題の討議では、中央分裂の責任論に集中し、極左冒険主義の原因と責任の追及を故意に避けた。八月一日に第一回中央委員会を開催し、議長に野坂参三、書記長に宮本顕治が選出され、旧主流派はほとんど役職から外された。結果として旧国際派勝利の大会となり、野坂・春日正一らと結んで、宮本・袴田里見らのグループが実権を握ることになる。同時に旧国際派の春日庄次郎・山田六左衛門・亀山幸三らは中央少数派となった。徳田旧主流派と分裂解消を急ぎ、従来の革命戦略について自己批判を欠いて党章を強制する宮本に、春日庄次郎は反発を強める。八月一八日、綱領問題小委員会が設置され、野坂・宮本・袴田・春日正一らが少数派の神山茂夫・春日庄次郎・亀山らを抑える形で入り、地方に対する統制を強化、党章反対派の排除と抑圧を開始、反対派最強の地盤である東京都委員会を第一の標的にしていく。春日庄次郎は七月の記者会見で党幹部を批判した離党理由書を発表、党は〈反党分派活動を開始した〉として、春日庄次郎、山田六左衛門らを除名する。[13]

「灰色の午後」が発表された一九五九年は、日米安保条約改定を

めぐり国内が騒然とした年であった。三月に安保改定阻止国民会議が、社会党・総評・原水協・全学連・日中友好協会など一三四団体より構成され、共産党はオブザーバーとして参加した。社会党右派は共産党の参加に反撥、六〇年一月に社会党から分裂して民主社会党を結成し、安保改定には是々非々の態度で臨むことになった。すでに、全学連主流派は六全協で穏健化した共産党に飽き足らず、除名された学生党員達がラディカルな革命路線を揚げて、五八年一二月に共産主義者同盟（ブント）を結成していた。ブントは、共産党の指導下にある全学連反主流派と対立しながら、先鋭的な直接行動に傾斜して行った。[14] 学生層の離反と革新陣営からの疎外に対して、共産党は、五八年一一月、第三回中央委員会総会で「党生活確立と党勢拡大の運動」を提起し、一九五九年一月第四回中央委員会総会（第七回党大会）で、反米帝国主義・反植民地化の闘争方針を打ち出した。さらに〈当面の大衆闘争に積極的にとりくみながら、そのなかで党勢拡大を独自の課題として目的意識的に追求するという基本的な方針[15]〉を樹立した。この時期の『アカハタ』講読数の伸びが示すように、宮本顕治主導の共産党は党勢拡大に力を注いだ。佐多は、一九五八年に松川事件対策協議会副会長に就任し、『佐多稲子作品集』全一五巻を筑摩書房から刊行（〜一九五九年一〇月）している。一九五九年には広津和郎とともに松川事件の裁判闘争に関わる活動をしながら、『アカハタ』短編小説の審査も担当している。安保条約改定を控えて緊迫した政治状況下、佐多の党内位置は安定していたのである。しかし、六全協以降、全学連主流派の離反、共産党不信の趨勢を象徴するかのように、吉本隆明・武井昭夫ら若い世代による、旧プロレタリア文学世代に対する戦争責任問題が提起されてもいた。[16]

「灰色の午後」は、「くれなゐ[17]」・「歯車[18]」に続く時期の佐多の実生活を題材にした小説である。佐多はエッセイ「作品の背景」で、「灰色の午後」を〈書いているときの私は、私の関係する政治的な面での辛い問題を一応通り過ぎて、心に淀んだものはありながらそれも流している、という状態の中にいた〉と述べている。[19] さらに、エッセイ「作家というもの」において、丸岡秀子の『田村俊子と私』に触れて、「灰色の午後」発表後も、まだ田村俊子の実名を上げるには心理的な抵抗があり、田村と窪川鶴次郎の恋愛事件から実に四〇年後の時点でも、強い拘りがあることを表明している。[20] にもかかわらず、何故、安保反対運動が沸騰する時期に、日中戦争勃発期の実生活を「灰色の午後」として小説化しなければならなかったのか、さらに〈流している〉とは言え、執筆時点の佐多の〈心に淀んだもの〉とは何かを、あらためて問わねばならない。

「灰色の午後」は、一九三六年大晦日の夜、作家仲間の美濃部数

子と川辺折江、二人の友達で折江の夫惣吉の主治医でもある吉本和歌が、三人連れ立って浅草見物をする場面から始まり、一九三八年一二月暮、川辺夫婦が銀座のドイツレストランで会食する場面で閉じられる。プロレタリア文学運動に参加して来た川辺夫婦が逮捕され、出獄後に文学組織・党の壊滅に遭遇し、権力との戦いを個人レベルでしか展開出来なくなった時期を小説時間としている。夫婦間の亀裂と性的妥協、その結果として戦時体制に組み込まれていく過程が、ヒロイン折江を中心に描かれている。惣吉の気配から、先年体験した夫婦間の危機の再燃ではない、何か別のものがあるという折江の直感から物語が始まる。全編二三章中[21]、第四章で折江は、惣吉の相手が年上の女性で、それが和歌ではないかと感じていることが仄めかされ、第一九章で、その事実が判明する。しかも数年前に離婚騒動を経験している川辺夫婦は、今回の事件発覚後、またしても結婚生活を続けるという顛末になっている。折江（佐多）は三三歳、惣吉（窪川）は三四歳、数子（百合子）と和歌（田村）は三八歳で、和歌以外はモデルの実年齢に設定されている。和歌の境涯及び職業は架空で[22]、年齢に到っては一五歳も若く設定されていて、窪川と田村の年齢差を超えた情事について、佐多の当時受けた衝撃の大きさが感じられる。登場人物については、佐多の従来の政治的私小説同様、ほぼ実在のモデルが特定出来る。すでに小林裕子が言及しているが[23]、その他に、川辺夫婦の長男亮吉は健造、次女節子は達枝、第四章の〈夫婦どちらも仕事をしてゆく苦しさを書いた〉小説[24]、第七章の折江の公判[25]、樫村と宮田良子の越境記事[26]、コーヒー店の出店計画[27]、第一四章の岸子と藤原の執筆停止[28]、第一六章の美濃部の郷里の不幸による数子の東京不在[29]、第一七章の〈二年半前に中途半ぱに終つていたある作品のつづき[30]〉について、事実と対応している。

二、

一九三六年から三八年の折江の生活は、佐多の実時間を数年先取りしているという小林裕子の指摘があるが[31]、それは折江に限ったものではない。佐多は一九五一年、宮本百合子の死の二ヶ月後に発表した「百合子さんについて[32]」で、〈当時の合法と非合法の両面を通じて共に歩いた、いわば唯一の人間として私自身の責任を今改めて感じている。この責任の感じは、「十二年の手紙」の時期の後半における私自身の恥の感情によつて一層、複雑になる。〉〈私自身の当時の泥んこにまみれたような生活は、百合子さんにとつては、触れるのも厭なおもいをさせたにちがいない。百合子さんは、はねかえる泥の一つでさえ、それが泥とわかればさつと潔癖に飛びのく人であつたから。〉と述べている。すでに早く、本多秋五[33]や平野謙[34]の指摘する如く、「灰色の午後」は、百合子の存在を抜きにして語るこ

とが出来ない。

数子は折江夫婦が先年の夫婦の危機を乗り越えて、立ち直りを見せていると思っており、〈今夏〉ようやく三年余りになって接見禁止が解かれた夫への面会を日課にしていた。〈今年始め〉に数子が実家を出て独りで住んでいる家も、巣鴨刑務所に近い場所にあった。〈数子は現在の状態の中で、もつとも威儀正しく暮らそうとしていた。内容的に、ちりひとつ立てまいとしているように見えた。はねかえつてきた泥など早速水で洗い流そうとしているようでさえあつた。[35]〉とされている。〈はねかえつてきた泥〉の表現は、「百合子さんについて」の先掲の記述と重なっている。[36]数子は惣吉の今回の所業について、折江夫婦だけの問題ではなく〈私たちすべてにかゝわることなのよ。私たちの時代の善意の抹殺を意味する事柄〉すなわち、革命運動陣営全体の名誉を汚す許すべからざる行為だと述べ、〈けがらわしさに堪えがたいように視線[37]〉を折江に向ける。

ところで、数子の潔癖さを象徴するかのようなこの言葉は、佐多の創作ではない。一九三八年九月二九日付の顕治宛書簡には、〈私がこのように苦しいのだって、その人その時代の善意の大抹殺だからです。〉とあり、実際に百合子の発した言葉であった。[38]また一九四三年一一月一八日付の顕治宛書簡には、〈特に私は十三年（昭和：北川注）の下らない事件のときは御主人から全く非友人的な扱われかたをしました。その人柄の底を見せられました。あのとき細君は目白の家の二階で、何と慟哭したでしょう。そして、身をしぼるような声で「わたしは不幸になりたくない。正しいことからでも不幸にはなりたくない」と泣きながら云いました。〉とある。[39]〈御主人から全く非友人的な扱われ方〉とは、惣吉の和歌との口裏合わせと対応している。百合子は田村事件について〈下らない事件〉と評しているが、数子も和歌事件を〈何の足しにもならぬこと〉〈馬鹿らしい〉〈くだらない〉と述べている。[40]百合子の家で佐多が慟哭したことも、数子の家における折江の姿と対応している。折江は一〇月に入って、離婚のために転居する家を見に行った帰りに、その場所から近い数子の家へ足を向ける。数子の完璧な拒否に出会う第二〇章の場面であるが、〈数子にしか自分の心の寄せ場がなかつたから、たどりつくようにして[41]〉やってきた折江は、孤独の中に突き落とされる形となる。

ところが、百合子の日記・手紙から田村事件後も日常的な交流が、一九四一年一一月頃までは持続していたことが窺える。たとえば、一九三八年一〇月二三日付の顕治宛書簡では、〈良人を弁護する気、合理化する気は持たず、しかも、離れられない情愛を感じている妻君の、僻ませず、立ち直らせようとする骨折は、実に力一杯です。[42]〉とある。一九三八年一〇月二八日付の顕治宛書簡では、〈戸塚の細

君〉は〈唯一の親友〉、〈私生活について話しを、どっちかというとこれ迄余りしなかった〉が、〈この間は底の底まで吐露しました〉とある。一九四一年一一月三日付の顕治宛書簡では、佐多の文芸銃後運動四国巡回講演中、百合子が脳溢血で倒れた佐多の祖母を見舞ったことが記されている[43]。さらに、田村俊子事件当初、書簡に見る百合子は、窪川には厳しく、稲子には優しい。

しかし、一九四四年一月二四日付の顕治宛書簡には〈私には何一つ出来ることはない。それはそうでしょう？　何も分らないように暮したのだから、この二三年……[44]〉とある。さらに、一九四三年一一月一八日付の顕治宛書簡では、〈「くれない」のときは作者に信望とでもいうものが在りました。現在はそれはなくなりました。〉〈馬鹿なこと〈男の側〉にしろ、あのときは一つ通ったものがあり、女の側に真摯な向上の欲望がありました。今は女のひとの中にもひどいすさみがあり、それを癒し立て直すのは実に大事業です。〉〈酸鼻という感じがいたします。〉と、佐多を酷評している[45]。一九四一年頃から疎遠になり、一九四四年には佐多の方から交流を絶っていたようである。「灰色の午後」は数子についても、百合子の実像を数年早めた形で先取りしており、数子に拒絶された折江の孤独を際立たせていることがわかる。

三、

第八章には、折江が惣吉に対して性的に迫り、惣吉があやし宥めて、逃げる場面がある。第一〇章には、折江が猜疑心と激情に駆られて、深夜、惣吉の下宿に彼の所在を確めに行く場面がある。第一八章には、数子がピエロの役回りを演じることになるのを知りながら真相解明を依頼し、彼女が帰って行った後、惣吉は折江を誘い、折江もそれに応じる夫婦の情痴場面がある。第二一章には、折江が〈閨房の中だけに通用する言辞〉を口にして、惣吉を誘う周知の場面がある[46]。

「ほら、お前だつて」

見破られる官能のたしかな証拠に、羞じはその中にはぐらかして折江は埋没していつた。その間にひらめくおもいは、今はもう共犯の意識であつた。

あゝ共犯だ、共犯だ、どこかでそう叫ぶ彼女の悲痛な泣き声は、官能の泣き声の中にひとつになつて妖しい勝利を挙げていた。しかしその時、折江の魂の中に保たれていた大切なものは、ぱちんと音を立てゝくだけ散つていた[47]。

この時、砕け散った〈折江の魂の中に保たれていた大切なもの〉とは、夫の背信を許さぬ高潔さ、情欲に溺れぬという矜持、さらに

はコミュニストとしての反体制姿勢であろう。〈共犯〉とは、和歌や数子に対する夫の背信行為に加担することを指す。さらに、第二三章に示されるように、夫婦そろって武漢三鎮陥落の祝賀提灯行列を見物して、皇居で振られる天皇の提灯に歓喜する群衆と一体化して戦時体制に組み込まれ、侵略戦争に加担することを表わす。ここに夫婦間の頽廃・妥協が、戦時体制加担を呼び込むという「灰色の午後」における戦争屈服契機説が示される。佐多は一九四八年に発表した「道」[48]において、ヒロインが雑誌社の誘いで中国戦線慰問に行く際、それを止めなかった夫の姿を点描している。『佐多稲子全集　第四巻』の「あとがき」では〈私の戦時体制に協力した行為と、そこにおもむかせた窪川〉というように夫の加害責任に言及している。[49]さらに「年譜の行間（9）」では、〈夫婦の間に信頼が失われ、緊密な関係が崩れ、退廃的になっていくと、社会に対する自分の生き方、態度、思想的なことまで、退廃の色合いを持つようになる〉として、〈夫婦の狎れ合い〉が自らの戦時下屈服の主たる契機であると述べている。[50]「灰色の午後」では、戦争に傾れ込む時局と、それに抵抗して来た人々及び折江の後退していく様が、第二・五・七・一一・一四・一五・一六・二〇・二三章と、幾度も繰り返して書かれている。この点からも「灰色の午後」は、一見して「ある夜の客」[51]とともに、吉本隆明らによる戦争責任追及に答えようとした小説であるといえる。

しかし、「灰色の午後」には川辺・樫村・伊原・美濃部の四組の男女が出て来る。最終章には、まず伊原の死が語られる。伊原は会社勤めの傍ら、プロレタリア文学運動に参加した経歴を持ちながら、運動壊滅後、惣吉に兄事し、文学の表舞台を目指して活動を模索していた人物である。川辺家に同居しながら出版社に通勤していた万津子に恋して結婚、子供が生まれた矢先、無理が祟って肺結核のために死ぬ。志半ばでの死である。続けて、恵子の死が重ねられる。樫村は地下潜伏中に検挙され、転向して出獄後、新劇の演出家として活動していたが、突如として女優とソ連に逃避行する。それは革命運動のさらなる展開を夢見てのことではあろうが、肺疾を抱える恵子にとっては、同行拒否を宣告されたことになる。そのような状態で死なねばならない恵子の孤独が浮かび上ってくる。美濃部夫婦も心の絆は磐石であるかにみえるが、美濃部が官憲の手中にある限り、獄中死の危険と常に背中合わせである。このように伊原・杉本・美濃部三組の男女の不遇な形を示すことによって、信頼する仲間内から孤立した折江が、たとえ官能に突き動かされ、眼前の退廃の極みの惣吉に縋りついたとしても、一概には責められないという読みを誘うことにもなっている。

折江・惣吉の共犯によって、一転して被害者となった和歌も孤独

から抜けられない。和歌は〈これからあとね。私、とき〴〵あなたたちの家へ、御飯でもよばれに来ちやいけない。駄目？　そんなことでもなけりや、私、とつても淋しくてやりきれない〉[52]と述べる。平野謙が〈肺腑の言〉と評するものであるが、[53]佐多はこのような和歌を描くことで、恋敵であった田村俊子の寂しさをも汲み取っている。時あたかも、平野謙が「『群像』十五周年によせて」[54]で、現下の中間小説の盛況と純文学の衰退を言上げしたことを発端に、いわゆる〈純文学論争〉が喧しい折であった。佐多は、「灰色の午後」の後の中間小説「振りむいたあなた」[55]で、一夫一婦制に疑問を呈する男性や、妻子ある男性との恋に悩み、身を持ち崩す職業婦人の姿を描いている。また「夜と昼」[56]では、夫に以前から恋人がいたことを理由に離婚した女性が、既婚者である義弟と不倫関係に陥り、親族の人間関係を乱すことも辞さずに密会を繰り返すような、愛欲に溺れる男女の姿を、肯定的に描いている。佐多が「灰色の午後」を書くことによって、倫理的で高潔であった百合子のかつての批判を超える地点に出たことを示していよう。[57]

先述したように、数子は同時期の百合子より峻厳であるように設定されている。吉本隆明らによる戦争責任追及に促される形で、戦時下の自分が孤立に陥ったことは百合子に、戦争協力は窪川に責任の一端があると考える地平に、佐多が一歩踏み出したということであろう。花田清輝は、「腹話術師とその人形――佐多稲子論」[58]において〈『泡沫の記録』が、いちおう、「戦争責任と個人的良心をもっとも鋭くかかわらせた問題作」のような外観をとっているにせよ、そこで批判されているのは、かの女自身ではなく、かえってかの女の批判者のほうだといったような気がする〉と述べている。さらに澤地久枝は「試される」[59]において、〈佐多さんは、ほんとうに戦争責任というものを感じているとおっしゃりながら、実はどこかで、でもわたしにはわたしの言い分があるというものを死ぬまでお持ちであったような気がします。〉と述べている。花田や澤地の指摘は、「灰色の午後」においても当てはまる。

恥を曝すとは、晒すことでもある。自己暴露の悲哀という日本自然主義の伝統に則した私小説の方法に拠りながら、夫婦の危機→仲間内からの拒絶→孤立→夫婦の狎れ合い→戦時協力、という図式のもとに、佐多は戦時協力が、決して自分一個の責任に帰するものではないことを確認し、自己の恥を雪ごうとしたのである。さらに、戦時下非転向を貫いた宮本夫婦の前に恥を曝した佐多は、戦後のこの時期、小説創作行為によって、宮本夫婦の如き一義的な道以外は、共産主義者・文学者として、果たして無価値であるのかを問おうとしたのではないかと思う。「灰色の午後」執筆は、佐多が宮本夫婦に対するコンプレックスを払拭し、新たな地平に出るための必須の

作業であったのである。

注

① 平野謙「今月の小説（上）」（『毎日新聞』一九六〇年一月二八日）

② 阿部知二・平林たい子・亀井勝一郎「創作合評」（『群像』一九六〇年三月）。阿部と平林は小説の結末について、中途半端な終り方だと述べている。佐多も「あとがき」（「時と人と私のこと（17）――人を偲び、年譜におもう」（『佐多稲子全集　第一八巻』講談社一九七九年六月）において、〈書きあぐねた末の逃げで終っている〉と述べている。

③ 小田切進「暗い日々と暗い生活――戦後の転向問題を通過していない――」（『日本読書新聞』一九六〇年四月一八日）

④ 江藤淳「時代の圧力と愛情生活――佐多稲子著『灰色の午後』」（『週刊朝日』一九六〇年四月二四日）

⑤ 小久保実「文芸時評」（『近代文学』一九六〇年三月）

⑥ 中村真一郎「佐多稲子の抒情――『灰色の午後』を読んで」（『文学界』一九六〇年七月）

⑦ 十返肇「誠実な自己凝視――佐多稲子著『灰色の午後』」（『日本経済新聞』一九六〇年五月二日）

⑧ 草部和子「書評　佐多稲子著『灰色の午後』」（『アカハタ』一九六〇年五月一二日）

⑨ 野間宏「著者を語る――『灰色の午後』の佐多稲子さん」（『朝日新聞』一九六〇年四月一五日）

⑩ 小林裕子「解題『灰色の午後』の虚構性」（『佐多稲子全集　第一〇巻』講談社　一九七八年九月）

⑪ 小林裕子「『灰色の午後』について」（『独立文学　八号』一九八五年七月）

⑫ 長谷川啓「『灰色の午後』論――夫婦の共犯の風景――」（『日本の文学　第六集』有精堂　一九八九年一二月）

⑬ 兵本達吉『日本共産党の戦後秘史』（扶桑社　二〇〇五年九月）二四二頁を参照した。

⑭ 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社　二〇〇二年一〇月）五〇三頁を参照した。

⑮ 『日本共産党の五十年　増補版』（新日本出版社　一九七八年三月）一六四頁。後に宮本顕治と袂を分かった志賀義雄でさえ、『赤旗』講読数について、〈六全協以後、次第に、その拡大に努力が集中された。〈また他の機関紙誌も発行部数が増大し、紙代回収も確実となって、党財政はその収入によって優にまかなわれるようになった。〉〈宮本が機関紙拡大に努力した功績は大きい。〉（「機関紙の役割」『日本のこえ』一九七四年五月六日）と述べている。

⑯ たとえば、吉本隆明「前世代の詩人たち――壺井、岡本の評価について」（『詩学』一九五五年一一月）、「『民主主義文学』批判――二段階転向論」（『荒地詩集一九五六』一九五六年四月）、『芸術的抵抗と挫折』（勁草書房　一九五八年四月）など。

⑰ 『婦人公論』一九三六年一月～五月、『中央公論』一九三八年八月

⑱ 『アカハタ』一九五八年一〇月一日～一九五九年四月一一日。「歯車」については、拙稿「佐多稲子『歯車』――非合法時代〈正史〉としての制約」（『昭和文学研究　第六二集』二〇一一年三月）参照のこと。

⑲ 『東京新聞』一九六八年七月八日

⑳ 『中央公論』一九七三年四月

㉑ 雑誌初出のものは、第一四章が重複していて、結びは第二二章となっているので本稿では訂正した。

㉒ 和歌の職業が医者という設定について、病気が癒えた患者は医者の手を離れるように、転向で傷ついた惣吉は心の傷が癒えれば和歌の元を離れるメタファーになっているという長谷川啓の指摘がある。（「妻の官能の覚醒――不倫小説『灰色の午後』の光景」『日本文学誌要　四二号』法政大学国文学会　一九九〇年三月）

㉓ 小林裕子は注⑪の論文において、〈美濃部と数子夫妻は宮本顕治と百合子、吉本和歌は田村（佐藤）俊子、伊原夫妻は筧清（映画評論家）と光子（後に宮木喜久雄夫人）、樫村と恵子夫妻は杉本良吉と杉山智恵子、宮田良子は岡田嘉子、柳井は柳瀬正夢、藤原は中野重治、常子は窪川鶴次郎の妹梅子〉、上海で戦死した〈新劇俳優〉は新築地劇場の友田恭助と特定している。

㉔ 『群像』一九五九年一〇月。この小説は「くれなゐ」（『婦人公論』一九三六年一～五月）である。

㉕ 一九三七年五月に懲役二年執行猶予三年の判決。

㉖ 一九三八年一月五日の『朝日新聞』には、新協劇団演出家杉本良吉と女優岡田嘉子が、一月三日カラフト〈半田沢〉の日ソ国境に、国境警備官の〈慰問〉と称して赴き、派出所慰問のあと、国境を越えたとある。また、強制訊問の結果引き出された岡田嘉子の証言に基き、杉本が一九三九年一〇月二〇日に処刑されたという事実が明らかになったのは、一九九二年のことである。（『朝日新聞』六月三〇日）

㉗ 宮本百合子日記には、一九三八年一月三日〈五銭のコーヒー店を出したらというプランを立てている〉（『宮本百合子全集　第二四巻』新日本出版社　一九八〇年七月　七六九頁）とある。

㉘ 「灰色の午後」第一四章に〈数子は、やはりリストに挙がつていると いう藤原と連れ立つて内務省警保局へ事実の有無を確めに〉とあるが、宮本百合子日記一九三八年一月一七日には〈警保局図書課に禁止についてききにゆく、中野と。〉（『宮本百合子全集　第二四巻』新日本出版社　一九八〇年七月　七七七頁）とある。

㉙ 百合子は一九三七年三月二六日から四月一五日にかけて、顕治の父捨吉の病気見舞中に、顕治の叔父の急逝に遭遇している。（宮本百合子日記『宮本百合子全集　第二四巻』新日本出版社　一九八〇年七月）

㉚ 『群像』一九六〇年一月。この小説は「晩夏」（『中央公論』一九三八年八月）である。

㉛ 注⑩に同じ。

㉜ 『展望』一九五一年三月

㉝ 本多秋五「佐多稲子『灰色の午後』」（『東京新聞　夕刊』一九六〇年四月一三日）

㉞ 平野謙「作家と作品　佐多稲子」（『日本文学全集四七　佐多稲子集』集英社　一九六七年一一月　四三四頁）

㉟ 『群像』一九六〇年一月。〈数子はこの夏、ようやく三年余りになって接見禁止の解かれた夫〉とあるが、「年譜」『宮本百合子全集　別冊』（新日本出版社　一九八一年一二月）五八頁では、一九三六年六月二四日に〈一年二ヶ月ぶりに面会〉とある。

㊱ 一九四五年八月一八日付顕治宛て書簡で、「玉音放送」に接して〈作家として一点愧じざる生活を過したことを感謝いたします〉（『宮本百合子全集　第二二巻』新日本出版社　一九八一年一月　六三九頁）と書き付けた百合子の自負、潔癖さと呼応している。

㊲ 『群像』一九六〇年二月

㊳ 『宮本百合子全集　第一九巻』（新日本出版社　一九七九年二月）四五二頁。これは『十二年の手紙　上』（筑摩書房　一九五〇年六月）に、九月二七日付書簡として掲載されている。佐多が、百合子から直接聞いたか、この書簡に拠ったかは特定できない。

㊴『宮本百合子全集　第二二巻』（新日本出版社　一九八一年一月）二五二頁。ただし、『十二年の手紙』には未収録。

㊵　注㊲に同じ。

㊶　注㊲に同じ。

㊷『宮本百合子全集　第一九巻』（新日本出版社　一九七九年二月）四七七頁

㊸『宮本百合子全集　第二一巻』（新日本出版社　一九八〇年三月）五一五頁

㊹『宮本百合子全集　第二二巻』（新日本出版社　一九八一年一月）三〇八頁

㊺　注㊹に同じ。二五二頁。この記述を含む書簡に初めて注目したのは、長谷川啓「女の時間・女の友情――『二つの庭』と『獄中への手紙』をめぐって――」（法政大学国文学学会『日本文学誌要　六〇号』一九九九年七月）である。長谷川は、この書簡から戦時下の佐多の男性関係に纏わる失踪事件の探索を試みている。

㊻　注㊲に同じ。

㊼　注㊲に同じ。宮本百合子にも一九三七年四月八日の日記で、顕治を求める官能の高ぶりを吐露した記述がある。〈何も彼も忘れてしまうような感覚に浸りこみたい渇望の彼方に、激しい感覚の欲求のあるのを感じる。手のひら、顎、頬、胸すべての皮膚が、求めているものがある。〈何でもよい、すべてを忘れるような感覚というのではなく、只一つの肉体がいるのであった〉（『宮本百合子全集　第二四巻』新日本出版社　一九八〇年七月　七二五頁）と記している。しかし、〈情痴〉を小説化することはなかった。本多秋五は、「知られざる作家」（『読書人』一九五八年八月二五日）において、百合子にも情痴を含めた深い人間観があったこと、それが、戦後〈きびしい人格主義美学に支配〉された人物のように見なされてしまったことを指摘している。

㊽『芸術』一九四八年五月。「私の東京地図」の最終章。

㊾　講談社　一九七八年三月

㊿「年譜の行間――（9）窪川から佐多に」（『別冊婦人公論』一九八三年四月二〇日）

(51)『群像』一九五八年一〇月

(52)　注㊲に同じ。

(53)　注①に同じ。

(54)　平野謙「『群像』十五周年によせて」（『朝日新聞』一九六一年九月一三日）

(55)『週刊現代』一九六〇年七月～六一年四月

(56)『主婦の友』一九六二年一月～一九六三年六月

(57)　長谷川啓は、「女の時間・女の友情――『二つの庭』と『獄中への手紙』をめぐって――」において、佐多が一九六三年の「松川事件確定の後」において、百合子の正当論の限界性を指摘したことに注目して、戦争協力という〈マイナスの経験をプラスに転化し〉、〈百合子を越える地平に到達していったのではなかろうか〉と述べている。拙稿は、それを「「灰色の午後」執筆時点に見ている。

(58)　花田清輝「腹話術師とその人形――佐多稲子論」（『群像』一九六一年八月）

(59)　澤地久枝「試される」（『新日本文学』二〇〇四年九・一〇月合併号）